B E Y?N D

ハレル家

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある現象を境に世界人口の約六割が超能力に目覚めた。

人々はその進化を――恐れた。

超能力に目覚めた人達は姿形が『人』という枠を離れ、『人外』へと変わり、糾弾する人々に訴えるも届かず、悲しみと憎しみの連鎖を繰り広げてしまった。

人工島に押し込まれ、人と超人類の間に深い傷跡が残ったまま数百年の月日が流れ、日本の近くにある超人類が住む島で起こったある事件をキッカケに一つの風を巻き起こすことを、まだ知らない……

目次

始天：天からの呪い ―― 1
一天：青年と機械腕 ―― 9
二天：正義感の翼 ―― 22
三天：鉄人大地に立つ！ ―― 31
四天：誰が為自分の為 ―― 42

始天：天からの呪い

〝世界は一枚のコインに似ている〟

どこの誰かが言ったこの言葉は、この世界ではこれ程真理をついた言葉である。

コインの表にあった世界が、ふとしたキッカケで裏にあった未来に裏返った。

普段干渉しないそれは些細なモノで裏返った瞬間、まるで我が家のごとく軽々と踏み出す。

それは人の未来も同じ、いや、それ以上に適用する。

〝人生は選択肢の連続〟

人は何時だって分岐点に遭遇し、選択を選んできた。それは小さくと大きい……いや、先が存在するかしないかの違いである。

『明日は晴れか雨』の単純な選択肢で太陽が異常な温度と共に地球（ほし）の生き物の命を奪う、もしくは隕石の雨が降って人類が絶滅するという可能性もあり、『明日から夏休みだから遊ぶぞ』という選択肢を選んだ翌日に人類史が完全に消滅するという可能性もある。

そして、この物語はそのコインが裏返ってしまった世界の物語である。

とある現象――世界各地の空に突如鉛色に輝くオーロラが現れた。超常現象に野次馬根性で見る人達や興味を示す研究者だったが、その余裕は世界人口の約六割が超能力に目覚めた事で瞬く間に奪われた。

人々はその進化を受け入れずに――恐れた。

超能力に目覚めた人達は姿形が『人』という枠を離れ『人外』へと変わり、ある者は友から拒絶され、ある者は家族から否定され、ある者は愛する人から心ない言葉を言い渡された。

それでも自分達は人だと主張するも糾弾する人々には声も心も届かず、人権を無視されて殺される人が時には、悲しみと憎しみの連鎖を繰り広げてしまった。

強力な力を持った人外に各国は連日会議に没頭し、彼らを『超常人（スペリオル）』と呼び、ある島国に独立という建前の幽閉を行うことで争いは終結した。しかし、時すでに遅く、人と超常人の間に深い傷跡が残ったまま数百年の月日が流れた。

裏切らないと信じたものが牙を剥く。

人の人生は死と隣り合わせと言うが、なるほど。よく的を射た言葉である。

誰もが死ぬ選択を持ち、誰もが死に抗う選択を持つ。

故に、この出会いは――

『あなたは、だぁれ？』

――選択に値する。

■――■■■――■

日本国土から日本海海上３３０キロメートル付近に島が漂っている。

人工島〝ダイダラ〟

『人』という枠を越えて超能力を得た人間――超常人が住む島であり、数百年前に人類が各地にある島や人工島に彼らの国を作り、国以外から出ることを禁じた……早い話で言えば『物資や支援等を少なからず提供できる国をやるから大人しくしろ』を含めた言い方で干渉を禁じられた島。

当初は強く反発していた超常人だが、数百年も長い月日によって少なからず納まって独自の文化を築き上げた。

ビルが建ち、喧騒が響くコンクリートジャングルを異形が跋扈する。普通の人間からすれば異世界に迷いこんだかのような景色だが、この島に住む住民達には日常である。

無論、学校や会社なども存在する。

『……次のニュースです。昨夜、北エリアの会社員数名が行方不明にあった事が判明しました。関係者によると彼らは数時間の残業の後に帰宅したと証言しており、目撃者もいます』

スマートフォンのワンセグによるテレビから流れるニュースはお世辞にも明るくなく、スマートフォンの持ち主は不満な表情で耳を傾ける。

『先月から約二十名近くの住民がこの島で行方不明になっていますが、どうなんでしょうか？　私は最近早めに帰っているのですが……』

『そうですね。大きな組織による誘拐説や【捕食】という超力（ビョンド）を持った超常人による猟奇的犯行説が飛び交っていますが、私の考えは――』

「おはよう」

専門家のような恰幅のよい男性が考えを主張する前に挨拶され、スマートフォンの持ち主はテレビを切って声の主に振り向いた。

そこには、服を着た〝闇〟がいた。

ブレザーが目立つ学生服を着ているが、全身が真っ黒の靄で覆われており、人型でこそあるが表情どころか目や鼻、口といった顔のパーツすら判別できないが、声色から友好的だと判断できる。

だが、声をかけられた方も人外である。緑の髪でカマキリの触角が生えた額にエメラルドグリーンの瞳。皮膚は両脚と両腕が緑色で指先が少し鋭く、前腕側部が細かい棘でカマキリのように4本脚で下腿が細長い。

「うーす鎌木。調子どうよ」

「特に問題ないよ八坂くん」

服を着た黒い霞――八坂御影にカマキリのような青年――鎌木凌平は快く応答する。見た目を除けば、学校で親しい間柄と雑談する風景である。

「何見てたんだよ?」

「連続失踪事件のニュース。今日で二十人近くが行方不明なんだ」

不安そうな表情を見せる鎌木を見て、八坂はどこか生暖かい視線を向ける。

「……ハッハーン……片想いしてるアイツが心配なのかぁ?」

「ち、ちがっ!? べ、別に雪風さんとは……」

「誰も雪風とは言ってないぜ? すごくわかりやすいよなぁ」

「おーっす。朝から騒がしいな」

あたふたする鎌木を他所に身体全体が青白く、所々骨がや身体に埋め込まれているコンクリートや金属が見えている青年――露崎幽人。その後ろについて来る形で全体的なシルエットは人間そのものだが、肌が赤く黒い紋様が走り、髪は毛先に近づくにつれ

黒くなるが更に真っ赤で腕の表面が硬い質感、脚は恐竜の様な鉤爪で真っ黒な羽毛に覆われた鳥のような足をした青年――スパイク・スパイキルが教室に現れた。
「おう。鎌木が何時ものだ」
「何時もってなに!?」
「そんな事よりも見たかよ昨日のあれ！」
鎌木のツッコミを無視し、露崎は二人に問いかけた。
「昨日って……ああ！『大物超力者（オーバーズ）ゴルディオンの活動記録２４時』のことか！」
「それそれ！」
超力者（オーバーズ）。
超力を悪用する超人犯罪者や超力を持った獣の捕縛・殺傷を行う職業。超力者になるためには資格証が必要である。民間超力者の資格取得条件は中卒以上となっている。
「どんな超力犯罪者も取り締まるダイダラの英雄的存在！　この島の平和を守る憧れの存在!!」
「完全無敗の連勝記録を今も更新し続けている」
「あぁ、僕も知ってる。あの動き見ながら戦闘での立ち回りとか見直してる」
「何より！　あの謎に包まれたルックス！　人外なら……なお良し!!」

「それは君の趣向でしょ」
「始まったな……露崎の人外ＬＯＶＥ。これ中々終わらないよな」
「おっはよー!!」
　露崎が机に乗って人外の魅力について語り始め、脱線したことに苦笑する三人。すると教室に誰かが新たに入ってきた。
　赤っぽい茶髪のポニーテールと赤目に八重歯が特徴的な活発な女子――真神千尋と青みの強い黒髪で前髪も長く、常にどちらか片方の目が隠れて透き通るような水色。ボブヘアーで長い後ろ髪を首の後ろで一本にまとめている下半身が人魚のような魚の車椅子に乗った女性――水無月海色の対照的な二人の女子だ。
「昨日のゴルディオン見た!?　バッタバッタと敵を倒す姿がカッコ良かった！」
「ボクも昨日のゴルディオン見たよ……悪人に叱責する姿……ドキドキしたなぁ……」
「大丈夫？　それ別の意味のじゃないよね？　正しい事を言ったゴルディオンの姿勢にドキドキしたんだよね？」
　どこか艶やかな雰囲気で言う水無月に不安げに質問する八坂。苦笑する五人に水無月は思い出したかのような様子を見せた。
「あ、そうそう。さっき先生に会ったけど、後で緊急学年総会するらしいよ」
「学年総会？　あぁ、行方不明事件についてか」

「先に行っといた方がいいのかな？」
「うん。手が空いてる人がいたら手伝って欲しいんだって」
「だったら行っとくか。ここで待っててもヒマだしよ」
八坂の言葉に全員が賛同し、一同は体育館へ向かった。少しずつ人も集まりだしたが、彼らは知らなかった。
これが島全体を揺るがす大事件の始まりでもあり、同時刻にとある場所で、ある人物との邂逅があった。
物語の歯車は、少しずつ動き出した。

一天：青年と機械腕

人工島ダイダラは東西南北の四つのエリアに別れている。

東エリアは港や空港等の交通手段が豊富にある島の玄関口となっており、他のエリアの移動もこの東エリアから来るバスや電車を利用する者が多い。また、貿易で輸入輸出もここから売買される。

南エリアはスーパーやデパート、レストラン街等の商業地区で買い物や寄り道をする場合はここに訪れる。

西エリアは住宅街。島で生活を営む人達はここで生活している。マンションやアパートが多く、一軒家は少ない。

北エリアはビジネス街で仕事をする大人の大半はここに訪れ、汗水垂らして働いている。

各エリアには必ず警察のような行政機関が常在しており、力を悪用する超人や不審者を即座に拘束する。最近では建設で増設した大型ショッピングモールや遊園地といった娯楽施設もある。

中央の島には学校等の公共施設が密集している。そして中央にはそびえ立つ島があり、そこは『超人特区』の1つで超人の安全と保護及び超力に関する研究が日夜行われている。

ただ、人工島ゆえに土地代が非常に高く、一軒家を買うことが富裕層のステータスとなっている。野菜を自家栽培して売ったり収穫したりする家もあるが食料自給率も限りなく低く、生活物資なども船上輸送でコストがかかるため、物価が高い。

閑話休題（それはさておき）。

東と北の間に娯楽用のビーチがあるが、現在の時刻は仕事や学業で行くような人もおらず、そもそも海開きには少し早い。そのビーチで人がいないにも関わらず砂浜に一つの人影が歩いていた。

三つ編みの茶髪。眼鏡を着用しているが、足が猛禽類の形状に近づいており、人面鳥よりも鳥人間に近く、身体のシルエットから女性だと判断できる。背中には生物としても異形の翼があり、首からは年代物の一眼レフカメラがぶら下がっている。

身体の特徴から彼女が超常人（スペリオル）だとわかる。その人物は浜に流れ着いた大きめの丸太に腰掛け、スマートフォンのメッセージアプリを開く。

「……」

どこか物憂げな表情でメッセージアプリに表示された文字を見つめる。やがて、その

文字を消去しようと指を動かそうとする。

「……？」

不意に何かの声が聞こえた。周辺を見渡すと、視界の端に遠くで何かが集まっている光景を見かけた。目を細め、よく見るとそこに――

「ミャー」

「ミャー」

「……ぐふ……」

「ミャー、ミャー」

――頭に猫のような耳がついた三匹の海亀に現在進行形で叩かれている気絶した青年がいた。

通常、普通の海亀を含む亀は声帯が無いので喋れないのだが、超常人が生まれたあの超常現象は人だけではなく、犬猫や鳥や大根といった動植物にも進化する可能性を与えた。中には超常人にも劣らない力を持った生物が誕生して猛威を振るうが、その時は超力者（オーバーズ）によって鎮圧される。

余談だが、青年にのしかかったり、ペチペチと叩いている海亀は進化したことで声帯と猫のような特徴を得たイルカ並に人懐こい性格の海亀で正式名【ネコナキウミガメ】である。

……海亀にイジメられている……

あまり見ない衝撃的な光景に言葉を無くす彼女。これが襲われていたなら夢見が悪いという理由で追い払うが、ネコナキウミガメは遊んで欲しくて青年を叩いている無邪気な行動なので止めれない。

とりあえず一枚残しておくかと考え、カメラを構えようとした瞬間、一匹のネコナキウミガメが頭で器用に青年をひっくり返された瞬間に青年の背中が光輝き、腕全体に橙色の幾何学模様が刻まれ、掌の中心に埋め込まれている橙色のソフトボールぐらいの球が特徴的な黒いロボットのような腕が現れた。

『コラ！　あっちへ行くんだ！　ほら！　あっちだあっち!!』

「ミャー」

「ミャー」

シッシッと追い払う素振りを見せる黒い腕にネコナキウミガメも非難の声をあげるも渋々の様子で海に帰っていった。

『ふう、やっと行ったか』

海に帰っていったネコナキウミガメ達の姿に一安心する黒い腕。しかし、世の中には〝一難去ってまた一難〟と言う言葉が存在する。

「オウ」

『……え？』

黒い腕の後ろから牛のような角が生えたアザラシとトドを混ぜたような生き物が黒い腕の手首の部分を口に加えた。

この生物の名は【ダイダラダイカイギュウ】と呼ばれ、人工島ダイダラの東と南エリアの間にしか生息しないこの島特有の生物で性格は温厚で人懐こいが、小型船を転覆させた記録を持つほどの怪力を誇り、迂闊に近付くと大怪我を負うことになる。

そしてダイダラダイカイギュウは黒い腕を青年ごと持ち上げ、そのまま――

「オウっ！」

『ぐばらぁ!?』

――地面に叩きつけた。

そのまま右に左にバシンバシンとリズミカルに地面へ叩きつける様子から遊んでいると思うが、端から見れば獲物を弱らせる肉食動物の絵面にも見える。

「オウ！　オウッ！　オウ!!　オウッ!!」

『ちょ、やめ、が、や、やめ』

「オウッ!?」

楽しくなってきたのかスピードが上げるダイダラダイカイギュウだが、突然黒い腕が消え、消えた事で青年はそのまま投げ飛ばされるように宙を舞って地面に転がり落ち

た。
　運命か女神のイタズラなのか、落ちた場所は――
「……大丈夫かしら？」
　――女性の目の前だった。
「……うう……」
「意識はあるようね」
「オウッ！　オウ!!」
『ぬ、いかん！　すまないが下がっていてくれ。巻き込まれてしまうぞ!!』
「……いや、知らないの？」
　苦悶の声をあげる青年に意識がある事を女性が確認するとダイダラダイカイギュウは遊んで欲しそうに重い身体を引きずりながら近付いて来る。また青年の背中から黒い腕が生えて女性に離れるよう注意するが、その様子に女性は呆れた表情を見せ、落ちていた一本の小枝を拾って海に向かって投げた。
「オウッ!!」
　するとダイダラダイカイギュウは方向転換し、女性が投げた小枝を追って海に帰っていった。
「……」

『……え？』

「ダイダラダイカイギュウは赤ん坊並に興味が移りやすいのよ……知らなかったかしら？」

呆ける一人と一機に女性は呆れた視線を向ける。知らなかった事を隠したいのかその視線を気付かないフリをする一人と一機。緩やかな波の音と猫のような鳴き声が砂浜に響いた。

「……ありがとな」

沈黙の重さに負け、青年は女性に礼を言った。

■――■■――■

「はいこれ。お茶で良いかしら？」

海から少し離れた所にある自販機。座って飲める為に設置されたベンチで女性は青年に自販機で買った飲み物を手渡した。

「悪い。後でジュース代払うな……えっと……？」

「ウイング。ウイング・オークレーよ。別に飲み物の一本ぐらい払わなくて良いわよ」

青年の言葉に女性――ウイング・オークレーは答え、ラベルに【ホアッ茶！】とポッ

プに書かれた飲み物を喉に流し込む。
「俺は臥煙明人、こっちはイデア」
『アキヒトと一緒によろしく頼む』
「アキヒトじゃなくて、アキトな」
　青年――臥煙明人は黒い腕のロボットアーム――イデアの間違いを指摘しながら自己紹介する。その様子にウイングは臥煙に質問した。
「さっそく質問なんだけど、どこ出身かしら?」
「……あっちだ」
　ウイングの質問に対して臥煙は南に指を指した。ペットボトルの蓋を開けようとするが、逆方向である事をわかっていないので開けられない。
　……南エリア……あそこは商業区だし、住み込みのバイトも探せばある……だけど、今どき南エリアの事をあっちなんて言う人は珍しいな……
　ウイングは臥煙の人柄を理解しようと見つめる……半月状のジト目に灰色ミドルヘア、見た目は自身が知るクラスメイトと同じ人に近いが、両目の色が角度によって様々な色に変化している。
　必死にペットボトルの蓋を開けようと身体を左右に揺らしながら悪戦苦闘する臥煙の瞳が様々な色に変化する様子を見つめていると、イデアがその様子に気付いた。

『どうしたのだ？』
「あ、いえ、何でもないですわ」
『……そういえば、学校は行っていないのか？　今日は平日なのだが……』
「……それは……」
　イデアの言葉にウイングは口をつぐむ。まるで触れてはいけないモノに触れてしまったような空気が漂い始める。
「イデア、別の話題にしろよ」
『何故だ？』
「何か言えない事情があるんだろ。あまり踏み込んだらダメみたいだ」
『むぅ……そうか……』
「俺が話すから、ペットボトルの蓋を開けてくれねぇか？」
　臥煙とイデアはヒソヒソと――実際は丸聞こえの会話にウイングは苦笑し、今度は入れ替えって臥煙がイデアについて謝罪した。
「悪いな。イデアはデリカシーが無いんだ」
「……それ、自分に対しても言ってるわよ」
　ジト目で見つめるウイング。臥煙も同じようにウイングを見つめるが、どこか違う所を見つめられているような違和感を感じ、臥煙に質問する。

「……ねぇ……どうかしたの？」
「なぁ……あんた……」
　瞬間、ガチャンという音と同時に臥煙の首に大きな枷が付けられた。
「……なっ!?」
「えっ!?」
『どうした急に!?』
　突然の事に戸惑う臥煙とイデア。ウイングは驚いたが、すぐに臥煙の首に付けられた枷を理解した。
「これって――」
「ちぃ、ハズしちまったぜ」
　ウイングの言葉を遮るようにガッチリと肥満の中間点のような金髪黒目の精巧な顔立ちの浅黒い肌の少年がアルファベットのYとWを混ぜたような奇妙な形の銃を持って現れた。
「全くよぉ……そこの鳥女を狙ってたのに邪魔されてハズしちまったぜ」
「……あなた……何者……」
　まるでキャッチボールで暴投してしまったような調子で答える少年に警戒心を抱くウイング。

「……教える訳ねぇだろ……これから捕まるヤツの言葉なんてよォ!!」

奇妙な形の銃を構え、撃とうとする少年に対して臥煙とイデアは固まり、ウイングは姿勢を低くして警戒する。

そして、銃を構えた少年とウイングの間に突然車が乱入してきた。

「なに?!」

予想だにしなかった事に驚く銃を構えた少年。ウイングはこれを好機と捉えて眼鏡をハズし、固まってた臥煙の腕を掴んで飛んだ。

その際に発生した強風に顔を腕で守るように隠す銃を構えてた少年。車の後ろを覆い隠していたカバーが強風によって捲られた。

「――――――」

そして、言葉を失った。

幸か不幸か、ウイングは自身の超力(ビヨンド)の影響で身体も自身の速度に耐えられるよう強靭になっている。

故に、見えてしまったモノを目に焼き付いたまま、臥煙と共にその場を離れていった。

■――■■――■

ウイング達が離れていった後、銃を構えてた少年は車の運転席に怒鳴り散らした。
「おいウィリアム！　邪魔すんじゃねぇよ!!」
「……邪魔ではないですよ。ライアン」
運転席にいたのは折れそうな程に細い黒髪青眼の端正な顔立ちの青白い少年――ウィリアムが自身に文句を言う銃の少年――ライアンを宥める。
「はぁ!?　邪魔以外の何物でもねぇだろ！　逃げられちまったじゃねぇかよ！　警察や超力者の連中に通報されちまったら終わりだぞ！」
「いいえ、彼女は我々を通報しません。むしろ、我々を追います」
怒鳴るライアンとは正反対に冷静な態度のウィリアム。その様子にライアンも冷静を取り戻してきた。
「……考えがあるんだな」
「ええ、事前に調べた彼女のデータを利用して我々のアジトに誘い込みます」
「そんなの考えてたんなら先に言えっての！」
ウィリアムの作戦に賛同するライアン。ウィリアムはそんなライアンを他所に後ろに目を向ける。
そこには、一人の女性が拘束されていた。臥煙の首に付けられたモノと同じ枷が付けられ、目隠しと猿轡で自由を奪われていた。

「ライアン、わざと跡を残すように運転をお願いしますよ」
「わーったよ。荒くなるから我慢しろよ」
そう言ってウィリアムは助手席に移動し、ライアンは荒っぽい運転で移動する。
自分達が向かった場所を知らせるように残る轍は悪意にまみれた招待状のように……口を大きく開けて獲物を待ち伏せする獣のように怪しい雰囲気を醸し出していた。

二天：正義感の翼

北エリアの外れまで飛んでいたウイングは担いでいた臥煙とイデアを降ろし、着陸して一息入れ、気持ちを落ち着かせていた。
『すまない。また助けられるとは……』
「これ、ハズれねぇ」
運んでくれたイデアがウイングに礼を言い、臥煙は自身の首に付けられた枷をハズそうとしている。
「無駄よ。それは超力犯罪者を拘束し、能力を封じる特殊な枷なの」
臥煙の様子を見ていたウイングの言葉にイデアは反応し、臥煙は聞いていないのか枷を叩いたりしている。
『そんな枷がこの島にあるのか？』
「えぇ、枷に仕込まれている特殊な電流で超常人（スペリオル）の体内にある『超力因子』という超力（ビヨンド）を発動する源を遮断して……無力化するの」
ウイングの説明を他所に臥煙は枷を左右から引っ張ろうとした瞬間、強い電流が全身に流れた。

「痛っ!?」
「無理やり取ろうとしない方が良いわよ。電流が強く流れるわ」
電流きよる激痛に悶える臥煙に遅い注意を促すウイング。その姿を見て、イデアはウイングに質問を投げ掛けた。
『……オークレー……気になったのだが、何故そんな事を知っているのだ？　枷の存在を知っている人が多くても、その枷の構造と原理を理解しているモノは少ないハズだ』
大抵の者は便利な道具としか思っていない、という言葉を付け足したイデアにウイングは曇った表情を見せる。
「……それを知る必要はないわ」
「お前、これからどうするんだ?」
「私はあの男を取り押さえる」
臥煙がこれからについて質問をすると、ウイングは即答で答えた。
『無茶だ!　あの男は装備からして只の小悪党ではない。それに我々を庇うように現れた車もヤツラの仲間という可能性もある……恐らくだが罠だ。行ってしまえば思うツボになってしまうぞ』
「それでも、私は行くわ」
確固たる決意を瞳に灯したウイングを見て、本気だと判断する臥煙とイデア。

「……助けは呼べないのか？」
「超力犯罪者の捕獲を正式な依頼として受理されるまで少なくとも三十分はかかるの。警察に依頼しても、私は目撃者として隔離される……それではダメ。目の前に助けを求めている人がいるのに動いてはいけないなんて……私には出来ない」
　ウイングの言葉にどこか居所が悪い表情を見せる臥煙。その様子を見たウイングは苦笑する。
「……」
「納得できない、という表情ね……他の人も同じような顔をされたわ。でも、私はほっとく事なんて出来ない……こうしてる間にも、助けを求める人がいる」
　そう言ってウイングは翼を大きく伸ばし、一回二回と羽ばたかせる。
「あなた達は安全な場所に……ごきげんよう」
　その言葉を臥煙とイデアに残し、ウイングは飛び立った。

　　??
　　――
　　????
　　――
　　??

　最後に見た砂浜に来たウイングは車の跡を追い、東エリアの廃棄されたコンテナ倉庫にたどり着いた。

「……誘われてるわね」
　コンテナ倉庫に続く跡を見て、入り口前に着地する。その際に発生した風で埃が舞い上がり、吸ってしまったウイングは数度軽く咳き込んだ。
「ホコリまみれでいかにもって感じね……出てきたらどうかしら？　それとも、出ていく気も起きない程に弱気なのかしら？」
「そんな挑発しなくても出てやるよ」
　コンテナ入ってすぐに来たことを言うと、奥からライアンが銃を持って現れた。
「あら、意外にあっさり出てくるのね」
「別に隠れるつもりもねぇよ」
　挑発するように言うウイングにライアンはイラついている表情で答える。一触即発の空気が微かに漂い始めた。
「単刀直入で一度しか言わない……あなた達が拘束している女性を解放しなさい」
「そいつはムリだ。俺達の目的の為に諦め――」
　瞬間、ライアンは蹴り飛ばされた。咄嗟に腕を交差して防ぐも腕に強い痺れが残っている。前を向くと蹴りを繰り出した体勢のままウイングがライアンに告げる。
「特別に三度目は言わないであげる……解放しなさい」
　超力によって亜音速で蹴られた事に気付いたライアンは懐から何かを取り出そうと

腕を――
「そこまでです」
――伸ばそうとして、止めた。
声の主は側に拘束されている女性を連れて現れたウィリアムである。
「――ッ!!」
「動かないでください。動けば、どうなるかわかりますよね?」
素早く行こうとするウイングにウィリアムは拳銃を取り出し、女性の米神に銃口を押し付けた。女性の首や両手に超力を封じる枷が付けられており、下手に動けば最悪の事態が起きてしまうことを想像する。
「……何が目的……」
「強いて言うなら、この島を根底から覆すような事ですよ」
「ウィリアム!」
ウィリアムの言葉にライアンは大きな声で怒鳴り散らす。まるで、言ってはいけない言葉を言ってしまったような反応である。
「大丈夫ですよ。彼女は答えてくれます」
「……何が目的かしら?」
「取り引きですよ……彼女を解放する代わりに、我々の行動を今後一切の干渉を禁止を

お願いします」

直接的に言えば『人質は解放するから二度と関わるな』と言ってるようなモノ。それに対し、ウイングの返答は――

「断るわ」

――即答の否定である。その言葉に目を白黒するウィリアムは彼女に質問した。

「……理由をお伺いしても？」

「簡単よ。私は放っておく事なんて出来ない」

自分自身のように語るウイングはライアンにも、人質になっている女性にも聞かせるような強い姿勢で続ける。

「助けを求める人がいる。助けを願う人がいる。そんな人達に手を伸ばさないで見過ごす事を私は出来ない……あの人は私を人間に戻そうとしてるけど、私は戻さなくていい……この力があったから、救えたモノがある」

凛、とする姿勢にウィリアムは内心惜しいモノを見るような心情でウイングを見つめる。

……ダイダラに送られる前に住んでいた島で彼女は数名の学生を病院送りにしたと聞きましたが、一人の女子生徒による恩赦でここに送られたようですね……

「それに……もう一人を解放する気がなく、隠している時点で私はあなた達を信用でき

ない」

その言葉にウィリアムとライアンは固まった。

「隠しているつもりかしら……バレているわよ」

……これ以上は無理のようですね……

鷹のような鋭い目付きで警戒しながら冷たく睨み付けるウイングを見て、ウィリアムは交渉決裂と判断した。

「……仕方ありません……予定変更です」

ため息を吐き、仕方ないと言った表情で呟いた瞬間、ウイングは崩れ落ちた。

「なっ!?」

驚くウイングだが、身体を動かそうとするも強く痺れて身動きが取れない事に気付いた。

「……なにを……した……」

「あなたが入って来る倉庫の入り口に麻酔薬を染み込ませた粉を撒かせて貰いました」

――〝ホコリまみれでいかにもって感じね……〟

「最初から……交渉する気なんてなかったのね……」

「えぇ、全ては我々の目的の為に……」

そう言ってウイングの首と両手に超力を封じる枷が付けられ、身動きできないウイン

グにウィリアムは氷のように冷たい眼差しで拳銃を向けた。
絶体絶命。まさにこの言葉が当てはまるウイングは覚悟を決め、ウィリアムから視線を逸らさないように睨み続ける。
ウィリアムが引き金を引こうとした瞬間、倉庫全体を揺るがすような轟音が響いた。

??――
????――
??

「な、何があった!?」
いきなりの出来事に驚くライアン。警戒を抱きながら、轟音が響いた壁の向こう側を警戒する。
……まさか超力者(オーバーズ)？　それとも警察？
自身が飛んでいる姿を目撃した誰かが連絡したのか予想するウイング。そして、壁が崩れた。
まるでドミノ倒しのように下から上に粉となって外の景色を見せる壁の向こう側に轟音を響かせた主が現れた。
「……なっ……!?」
しかし、そこに現れたのは超力者でも警察でもなかった。ウイングにとっては疑問符

で埋め尽くされる程の衝撃だった。
なぜ、ここにいるのか？
なぜ、たすけにきたのか？
なぜ、にげなかったのか？
なぜ、なぜ、なぜ、なぜ？
「みーつけた」
『やはり、ここだったな』
いつの間にか首の枷を外した一人（臥煙明人）と一機（イデア）がそこにいた。

三天：鉄人大地に立つ！

突如壁を壊して現れた臥煙とイデアの一人と一機のコンビに全員が戸惑っていた。
いつの間にか首の枷が外れている事もそうだが、どうやって枷を外したのか頭に疑問符が浮かび上がるばかりだ。
「テメェ……確かこの女と一緒にいた……」
「臥煙、イデア、どうやってここに！」
ライアンが銃を向けて警戒し、ウイングはどうやって自信の居場所を突き止めたのか一人と一機に問いかけた。
『それは私の能力でだ』
ウイングの問いにイデアが親指を立てたグッドサインで答えた。
『媒体に記憶されている映像から人物を静止画で切り抜いて選出し、人工衛星から位置情報を割り出した。数百数千以上の個人情報から一つ一つ割り出すのは一苦労だったが、見た感じ間に合って良かった』
「それにさ……言い忘れたらダメだと思ったんだ」

犯罪スレスレのイデアの発言を聞き流しながら臥煙はウイングに向けて苦笑しながら言い放った。
「飲み物、奢ってくれてありがとうな」
その言葉と同時にウイングは一つの謎が生まれ、臥煙の首に再び枷がつけられた。
「おわ!?」
「どういう理由か知らねぇが、自ら捕まりに来るなんざボランティア精神溢れるヤツじゃねぇか」
ライアンの言葉に臥煙は自身の首を拘束している枷に手を伸ばす。
「外そうたって無駄だ！　そいつは例え剛力無双の超力（ビヨンド）でも外れない品だって知ってる――」
バギン、と硬い物が壊れるような音が倉庫に響き渡った。
「――……だ……ろ……?」
「……な……!?」
「……え?」
カランカラン、無機質な物が地面に落ちる音が響き、臥煙はその様子を見て戸惑い始める。
「……もしかして、壊したらダメなヤツだったか?」

『ここに来る途中で調べて見たが、一つ当たり安くても八万円はするらしいぞ』
「聞きたくなかった」
イデアの言葉にうんざりした様子を見せる臥煙。しかし、ライアンやウィリアムはもちろんウイングはそこで驚いたのではない。
枷をした状態で壊したのだ。不可能の状態から出来た行動に全員が疑問よりも小さな恐怖を臥煙から感じた。
「テメェ……何しやがった！」
「ライアン！　今すぐに彼を倒しなさい!!」
『どうやら戦闘のようだ。私に身を委ねろアキヒト！』
「おう、それと明人(あきと)な！」
ウィリアムの指示より早く本能で臥煙に銃を向けて放つライアン。臥煙とイデアはライアンから放たれた枷を移動しながら避ける。
いや、そもそも『移動しながら』という表現は少し語弊がある。正確には『転がりながら』
である。
その動きはまるでスリンキーと呼ばれるバネ状に加工したシンプルな玩具だ。日本ではその色合いと形状からレインボースプリングと呼ばれ、別名トムボーイという名で

販売されている。その遊び方は階段から落とす事で生き物のような動きで下りていく玩具だ。
　臥煙とイデアの動きはまさしくそれで、縦横無尽に動き回る姿にライアンは翻弄されている。
「ちょこまかと動きやがって！」
「仕方ありませんね」
　見かねたウィリアムは拳銃を拘束されている女性に向けようとした瞬間、ウイングの翼が下から上へ払いのけた。
「させない！」
「グッ!?」
　拳銃が後ろに飛ばされ、持っていた右手を押さえるウィリアムの隙をついて臥煙が女性の付けられている枷を壊す。
「おい、しっかりしろ！　おーい！」
『頬をペチペチと叩くな。脳を揺らすのはオススメしない』
　雑な呼び掛けと対応をする臥煙に物申すイデア。その間に拘束されていた女性が目を覚ました。
「ん、んぅ……ここは？」

拘束されていた女性は長く腰まである真っ直ぐな白い髪に細くクールな目と水色の瞳が特徴、雪のように白く柔らかい肌で美人の一言だが、頭にある一対の白い角が彼女を超常人である事を示している。
「お、目が覚めたか」
「……だれ？」
『色々と言葉はあるのだが、強いて言うなら君を助けに来たオードリーに感化したコンビさ』
「オークレーな」
「無事で良かった。雪風さん」
拘束されていた女性――雪風氷織（ゆきかぜひおり）の無事を確認したウイングは安心から目尻に涙を浮かべる。その様子に少し微笑む臥煙だが、突如として軽くも大きな拍手が響いた。
「はぁ……まったく……」
ウィリアムは自身で起こした拍手が終わらせ、ポケットから眼鏡拭きを取り出して眼鏡を拭き始める。
「我々の邪魔をするあなた達の粘着質な性根は認めざる得ないようですね」
「……俺は初対面だけど？」
『記憶力に不安な点があるなら、日頃から青魚や炭水化物、チョコレートにココアを食べ

た方が良いぞ』
「いえいえ、そういう冗談じゃありませんよ」
　眼鏡拭きをしまい、怪しく光る眼鏡。その奥に輝く瞳には――
「あなた方をここで消した方が有益だと判断したからですよ」
　――純然たる殺意が唸り声をあげていた。
　ウィリアムは腕時計の外側を半回転させると外側に停められていた車が動き出した。
「車!?　誰も乗ってないのに！」
『おそらく遠隔操作だろう。止めるぞ』
　まだ本調子ではないウイングと雪風を庇って前線に立つ臥煙とイデアだが、その選択を甘く見ていた。
　目と鼻の先になった瞬間、車がジャンプするかのように横回転を加えて跳びながら車体に変化が起きた。まるでルービックキューブを動かすかのような動きで変形する。変化が終わった頃には車が二本足で立つ無骨な鎧を着たような大きなロボットが拳を構えた状態で地面を滑りながら接近していた。
「え、えぇぇぇぇ!?」
「対超力犯罪者鎮圧決戦兵器〝アトラス〟……その身をもって味わい尽きると良い」
　その言葉と同時に構えていた拳が振るわれる。とっさの事で固まる臥煙を横から誰

かに押された。
視線を向けると押したのは雪風だったが数秒後、機械仕掛けの鉄拳が彼女の横から振るわれ、壁に激突する。
「おい！　大丈夫か!!」
『後ろに跳べアキヒト!!』
雪風を心配する臥煙を叱責するかのようにイデアが後ろに飛ぶように命じた瞬間、再び振るわれた巨大なロボットの拳で壁に叩きつけられて痛みに悶える。
「雪風！　臥煙！　イデア！」
二人と一機を心配して駆け寄ろうとするが、ウィリアムによって阻まれる。
「逃がしませんよ。ライアンは彼女を警戒してください」
「おうよ」
ウィリアムはライアンに雪風を警戒するように指示を出す。
「……あなた達は……何を考えてるの……」
ライアンとウィリアムの考えが読めずに警戒するウイング。
「言った筈ですよ。この島の根底を覆す事だと」
「……少なくとも……超常人(スペリオル)を力ずくで押さえられない事を、するつもりかしら？」
その言葉にウィリアムは何故か感嘆の表情をウイングに見せ、ウイングはその表情に

首をかしげた。
「なるほど、流石はオークレー博士の娘ですね」
「……父とは……彼とは、関係ないわ」
　ウイングに少なからず漏れた不機嫌な感情に不適な笑みを見せるウィリアム。その表情にウイングは警戒心を一層抱いた。
「詳しくは言えませんが、我々のアジトでゆっくりと語るとしましょう……最も、話すつもりはありませんが……」
　そう言って拳銃を拾うウィリアム。ウイングは阻止しようにもアトラスに阻まれて身動きが取れない。しかし、ウィリアムの動きが途中で止まった。
「……」
「おや、生きていましたか」
　視線を辿ると臥煙が立っていた。しかし、その様子は無事とは言えず、十人中十人が立っているのがやっとと答えるような状態だった。
　後ろに倒れそうになるが、イデアが倒れないように臥煙を支える。
「逃げなさい」
　もはや虫の息とも言える臥煙を見ていられないウイングは逃げるように言った。
「あなたは巻き込まれた側よ。逃げる事に専念すれば生き残れるわ」

思えば、これは自分自身が踏み込んだ問題。幸いここから海までの距離は近い。自身が暴れる間に死に物狂いで逃げて飛び込めばロボットも海に飛び込むようなマネはしない。

『いヤだ』

そう考えた彼女の考えを臥煙とイデアは声が重なって否定した。

「ここで逃げたら、俺は大事な時に逃げる理由を探してしまう……あの時と、同じように……」

そう言った臥煙の頭の中で記憶が断片的にフラッシュバックを起こした。

――赤い池に沈む手足。

――真っ白で無機質な部屋。

――空など見えない黒い天井。

――そして、――――。

それは自身の始まりで終わりの日でもある。

そして、無機質な瞳を閉じ、再び開くと極彩色に変化する虹色と同じ輝きを持った瞳に変化した。

その変化を見て、ウイングは抱いていた謎が解けた。

……この人は、私と似ていたんだ。

自分とは根本的な部分は違えど、人を助けようとする部分は同じ。
しかし、違うのは自身に寄り添う存在がいるかいないかだった。
彼には有って、自身に無い。
「感動的ですね……ですが、無意味です。力量も把握できない人物が手にするのは破滅です」
「力量？　最弱以外に何がある……」
ウイングが考えていると、拳銃を拾ったウィリアムぎ臥煙に向けると臥煙は自虐的な笑みを浮かべながら答えた。
「……借りるぞ、イデア」
『もちろんだ。アキヒト』
その言葉と同時に銃から弾丸が放たれ、弾かれた。
予想外の結果に驚くウィリアムを他所にイデアが青白い粒子状の物体に変化していく。
「何だこれは!?」
……粒子状（ナノサイズ）に分解……再構築をしている？
冷静にイデアの変化を観察して解析するウイング。
粒子状に変化したイデアは臥煙の腕や足を覆い隠し、光が爆（は）ぜて銀色に鈍く光る鎧が

現れた。腕や足に鎧が付けられ、最後に頭を覆い隠すフルフェイスヘルメットとなり、まるで怪獣と三分間だけ戦う特撮番組のヒーローのような姿へと変わった。

『理想卿〝アルカディア〟……変身完了（コンプリート）』

機械的な音声と共に、目の部分にライトグリーンの光が灯った。

四天：誰が為自分の為

人工島ダイダラ東エリア。
普段なら人が寄り付かない廃棄されたコンテナ倉庫の中では異常が発生していた。
黒い巨大な機械仕掛けの巨人を相対するかのように成人男性と同じぐらいの大きさの銀色に輝くロボットに変身したイデアを纏った臥煙がライトグリーンの瞳を灯しながら構えた。
「まさか、そんな手を隠していたとは……」
「……」
ウィリアムが目の前の状況に軽薄な笑いを浮かべながら手を叩くが、臥煙は微動だにしない。
……様子見で撃つにしても、下手をすれば状況が悪化してしまう。ここは、アトラスで……
目の前の銀色の戦士に警戒しながら腕時計に手を伸ばすウィリアム。
残り数ｃｍの距離となった瞬間、目の前にいた銀色の戦士が消え、気付けば伸ばして

いた腕を掴まれていた。
「……なっ?」
……速度特化型！　悪手だったか！
自身の判断を悔いると銀色の戦士は腕をウィリアムの顔に向け、倉庫全体を昼間のごとく白く照らす程の強烈な閃光を放った。
「ぐぁ……目が……!!」
目をやられ、チカチカと明暗を繰り返す視界に苛立ちながらアトラスをＡＩによる自動迎撃に切り替える。
しかし、音が一切せず、静寂に包まれている事にウィリアムは怪しむ。少しずつ視界が元に戻ると銀色の戦士だけでなくオークレーもいなくなっている事に気付いた。
「……いない……となると……ライアン」
「こっちもいねぇ……逃げた」
先程のフラッシュが目眩ましと時間稼ぎだと判断したウィリアムは懐から懐中時計ぐらいの大きさの物体を取り出す。
「恐らくですが、これを予想しなかったとでも?」
スイッチを入れると中心に緑色の光が二つ点灯し、左側に点滅を繰り返す小さな赤い光が三つ表れた。

「……逃がしませんよ」
　ウィリアムは懐中時計ぐらいの物体――レーダーによって、倉庫の出入り口の方向を睨むように見る。その先に逃げた臥煙（えもの）達がいる。

??
――
????
――
??

『ここまで来れば大丈夫だろう……今の内に都市へ逃げよう』
　ウィリアム達が追跡を始める前、臥煙とイデアが合体した銀色の戦士――アルカディアは左にオークレー、右に雪風を俵持ち――俗に言うお米様抱っこで運びながら安全だと思った場所に降りた。
「逃げてはダメ。まだ捕まってる人がいるわ」
『まだいるのか!?』
　逃走を提案するもまだ捕まっている人がいる事にイデアは驚く。
「私が知る限りじゃ、一人いる」
『まいったな……これ以上は危険だというのに』
「……他に武器とかないの？」
　悩むイデアに雪風が質問すると、イデアは人差し指で頬を掻くような仕草をする。

『……ハッキリ言って無い……このモードはアーマーというよりパワードスーツに近い状態だ……ボロボロになったアキヒトを支えて運ぶぐらいだ』
「……アキヒトじゃねぇ、明人だ……」
　イデアの言葉に反論する臥煙。だが、声はいつもより弱々しく、先程のダメージが残っている事が明白だった。
「それより、捕まっているヤツが一人いるんだろ？　早く助けて逃げようぜ」
『バカな事を言うな。撤退するべきだ』
　ダメージを負ったまま助けようとする臥煙をイデアが止める。
『お前は全身にダメージを負っている。今はアドレナリンの大量分泌で痛みは薄いが、激痛で動けなくなるのも時間の問題だ』
「だったら、動けなくなる前に助ければ問題ないだろ」
『もう一人が何処にいるのか分からずに闇雲に探すのか？　非効率だ』
　イデアの理屈を臥煙は無理にでも助けに行こうとするが、動きを止めてでも助けに行くことを拒む。
「私からもお願い。どうにかならないかしら」
『なるならないの問題ではない。ヤツらに捕まってしまえば君達を助けた事が水の泡だ……引き際を誤ってしまえば取り返しがつかない被害が起こってしまう』

オークレーの言葉にイデアは反論するが、一理ある正論をすぐに返されて言葉を飲んでしまう。

『ここは退くべきだ。一人助ける事が出来なかったとしても、責められる理由はない』

「やだ」

助けに行く事を拒むイデア、逃げる事を否定する臥煙。平行線のまま時間だけが進み、

「……ねぇ……」

そんな二人（一人と一機）に雪風が声をかけた。

「どうして、今日会ったばかりの他人に無茶できるの？」

その言葉にオークレーは臥煙とイデアに目を向けた。

――■――■――■――

外はすでに夕方となり、陽が沈み始める。

廃棄されたコンテナ倉庫が多く建てられた東エリアを二つの人影と一つの巨影が闊歩する。

やがて歩みが止まり、ウィリアム達の前には探していた二人が見つかった。

「見つけましたよ」
　ウィリアムの言葉にオークレーと雪風は動じず、戦闘態勢を取る。ただ、一人足りない事にライアンが怪訝な表情を見せる。
「おい、あの野郎がいねぇぞ？」
「大方、別行動でしょう……ですが、我々の目的は彼女達です」
　ライアンの言葉にウィリアムは一歩、また一歩彼女達に近付く。
「よく逃げないでくれましたね。お陰で楽に終われそうです」
「……勘違いしないで……」
　ウィリアムの言葉にオークレーは麻痺が抜けきった事を表すかのように翼を広げ、警戒する。
「……『逃げない』じゃない……『逃げる事をやめた』の……」
　敵意を宿す瞳をウィリアムに向ける。その鋭さは先程よりも鋭利に尖り、同時に覚悟を持った事を言外に表しいた。
「……やれやれ、そうですか……」
　交渉に最初から乗らない事を先に言われたと理解したウィリアムは呆れたような仕草を見せ、ため息を吐いた。
「……〝めんどくさいな。オイ〟」

一転、濃厚な殺意がオークレーと雪風を襲う。
ダイダラによって設立された超人社会において馴染みの無い本物の殺意に体が震えるが、震える膝を握った拳で力強く叩いて抑えた。
「……ライアン、加減は無しです。こちらが上だと教えてやりなさい」
「お、良いのか。怪我だらけになっちまっても知らねぇぜ」
ウィリアムの言葉に呆れたように言うも表情は反対に嬉しそうに笑みを浮かべ、拳を鳴らしながら突撃する。
「ハッハー！　やろうぜ嬢ちゃん！」
駆け出すライアンに雪風は氷の霜が張っているような鱗に覆われた拳で迎撃する。
ガキィン、という人体では鳴らせない音が東エリアに響いた。
「流石は竜の超力（ビヨンド）を持つだけあるよなぁ!!　楽しませてくれよ!!」
「うるさい」
ライアンの挑発に氷のように冷たく一蹴して拳を振るう雪風。その見た目に反して力が強く、お互いが拮抗する殴り合いが始まった。
「さて、私は上空に飛んだ蝿を打ち落としますか」
「誰が蝿よ!!」
ウィリアムの言葉に強く反論するオークレー。兵器として起動しているアトラスが

彼女を捉えて拳を振るうも、振るった後には別の場所に移動している。
「急降下ジェット!!」
弾丸のように滑空しながら高速でアトラスの脚を攻撃するオークレー。コンテナ倉庫の壁を踏み台に加速してスピードは徐々に速くなり、やがてアトラスの反応が遅れるようになる。
……スピードはあちらが上……自動操縦にしましたが、処理速度が追い付きませんね。
「これで、決まり!」
ウィリアムの思考とは別にオークレーの亜音速に到達した体当たりがアトラスの脚を崩して横転させる。これにより、アトラスは処理の再計算を行って動きを止める事になる。
……よし。次はあの男を……!?
横転したアトラスを尻目に再び加速を行おうとしたオークレーだが、不意に足首を掴まれるような感覚と共に減速した。
「な、これは……」
「ふう、手間を取らせやがって……」
いや、本当に足首を掴まれていた。ウィリアムの腕がゴムのように伸び、オークレー

の足を掴んでいた。
外そうと手を伸ばすオークレーだが、それよりも早くウィリアムが勢いをつけてオークレーを地面に叩き付ける。
「……が!?」
ギリギリで受け身が間に合ったが衝撃は強く、肺から空気が吐き出される。
「手札と言うのは、相手を騙し、欺き、有利だと信じ込ませてから裏切るのが定石です。たかだか十数年生きた小娘に遅れはとりませんよ」
自身の超力（ビヨンド）である軟化を手札と呼び、痛みに苦しむオークレーに弱った獲物に近付く狩人のように歩み寄るウィリアム。オークレーは強く睨むもウィリアムは涼しい笑みを浮かべるだけだった。
「……ふふ、その目を見れただけでも胸が軽くなりますよ。アトラス、飛ばないように彼女の翼を折りなさい」
無機質な機械仕掛（アト）けの巨人（ラス）の手がオークレーに伸びる。雪風が助けに行こうとするもライアンに邪魔されて動けない。
少しずつ伸びていく魔の手に恐怖を抱いたオークレーが痛みを覚悟して目を瞑った。
「……？」
しかし、いつまで待っても冷たい機械の無機質な感覚がこない事に疑問符を浮かべ、

少しずつ目を開けると……アトラスが無数の触手に縛られていた。
「……なっ!?」
「どっっっせぇぇぇいいいい!!」
言葉を無くして驚くオークレー、異常事態に声を荒げるウィリアムの後ろから気合いが入った活発な声と同時にアトラスが宙を舞って頭から地面に叩き付けられた。アトラスを縛っていた触手が縮んでいき、辿っていくと二つの人影があった。
赤のメッシュが入った長い銀髪を一つにまとめて赤いヘッドホン、両肩から両手まで包帯が巻かれており、顔の左側を狐の半面で隠し、隠れてない碧の瞳が覗く。そして、右腕は無数の触手に分かれていた所から触手はこの人物の超力(ビヨンド)のようだ。
そしてもう片方は見慣れた男性が立っており、その男性はオークレーを見つけると声をかけた。
「どうやら、間に合ったようだな」
「ふぃー! ギリギリセーフ!!」
アルカディアとなっている臥煙がオークレーの姿に安堵し、その横で触手を操っていた女性——蔦崎勇菜(つたさきゆうな)が間に合った事に喜びを体全体で表していた。
「……バカな……どうやって……」
『それは私がやった』

予想だにしない事に狼狽(ろうばい)いを見せるウィリアムにイデアが説明する。
『オークレーが所有する携帯端末から衛生にアクセスして周辺の地図を獲得し、捕らわれている人物の個人情報を閲覧して携帯端末のＧＰＳ機能を逆探知して捜したのだ』
「まさか、港の近く……それもカプセル状の牢屋を閉じ込めて海の中に沈めていたなんて知らなかったけどな」
お陰で時間がかかった、と言って疲れた表情で呟く臥煙。しかし、その様子にウィリアムは納得いかずに臥煙へ問いかけた。
「なぜ、なぜ、何故名前を知らない人の為にお前は無茶が出来るんだ!!」
ウィリアムの言葉には理解できない感情が込められ、その瞳は動揺で揺れていた。その姿に頭を掻き、臥煙は答えた。
その答えは、先程の雪風と同じ答えだった。
「……俺さ……夢とか無いんだよ」
その言葉にウィリアムとライアンは疑問符を浮かべる。
「……夢……だと……?」
「ガキの頃から何も無くて、何で生まれてきたかも知らないんだ……でも、答えてくれたヤツがいる」
アルカディアとなっているので表情はわからないが、答えを知っているオークレーと

雪風には彼が語っていた時と同じ表情を浮かべているのだと理解する。
「『夢がなくても、守る事はできる。知らなくても、つなぐ事はできる』って言った……なら、俺は何度だって守って、何度だってつないでやる。アイツが好きだったこの世界の為なら、何度だってな」
仮面越しだが、強い意思と覚悟に満ちた言葉と同時に構える。すでに士気は臥煙達が上である。
「さぁて、反撃の時間さ！」
両手に触手を大量に生やして戦闘意欲を見せる蔦崎。
『いや、目的を達成した以上ここに長居する必要は無くなった。直ちに撤退すべきだ』
「えー、なんでだい？」
「……あの人達を捕まえた方が良いと思う」
しかし、出鼻を砕くかのように言うイデアに文句を言う蔦崎。雪風も蔦崎と同じ意見を言う。
『単純な話だ……時間がない』
直後、周囲の壁や地面が大きくひび割れ、周囲に地響きが鳴り出した。
「え？　え!?」
「どうなってやがる？」

まるで地震が起こるかのような唸る重低音に蔦崎とライアンが戸惑う中でオークレーは具合が悪そうな様子の臥煙に気付いた。
「……ねぇ、一体何したの？」
悪い事を隠そうとする子供のような様子の臥煙を優しく聞き出すオークレーに臥煙は呟き出した。
「……その……時間なかったから、手当たり次第壊しまくって……その……」
オークレーのすぐ側のコンテナ倉庫の壁が崩れ、向こう側が見える。その向こうには
――
「……少し、やり過ぎた……」
――辺り一面に瓦礫の山が積まれた惨状と言うべき光景が広がっていた。
「壊しすぎよ！　あなたはここを更地にするつもり!?」
「ごめん！　マジでごめん！」
『しかし、目的の人物を見つける事が出来たからプラマイゼロだ』
「むしろマイナスだけど!?　とにかく逃げるわよ！」
ここにいたら崩壊に巻き込まれると判断したオークレーは逃げるように指示すると空に飛び、臥煙は蔦崎の触手を掴み、雪風と同じタイミングで空に飛んだ。
「待ちなさ、くっ！」

逃走する臥煙達を阻止しようとウィリアムは腕を伸ばそうとするもコンテナ倉庫の壁が倒壊して阻止された。
「おいおい、やべぇぜ！」
「……仕方ありません。我々も撤退します」
壊れていく周囲にこれ以上の長居は危険だと判断し、ウィリアムとライアンは車形態に戻したアトラスに乗って東エリアから離れて行った。
数分後、東エリアの一部が崩壊し、明日の朝のニュースのトップになるが、そこで起きた騒動を誰も知らない。

―■――■■■――■―

中央エリア。
人工島ダイダラの中心部にして、心臓の部分であるこのエリアは学校等の公共施設が密集している。そして中央にはそびえ立つ塔があり、そこは『超人特区』の1つで超人の安全と保護及び超力に関する研究が日夜行われている。
その最上階にて、質素ながら高級感溢れる椅子に座り、机にて執務を行う人物がいた。
机の横に設置されている電話機が鳴り響き、その人物はゆっくりと手に取った。

『……私だ』
その声は老若男女が混ざったような声で性別が判別できないが、声の主から放たれる重圧から只者ではないと予測できる。
『……なに？　……作戦が失敗しただと』
どこか不機嫌な様子を見せ、人がいれば気絶するような威圧が部屋を軋ませる。
『……背中に機械の腕を生やした青年……なるほど……』
しかし、特徴を聞くと嘘のように霧散し、再び静寂で重い空気が漂い始める。
『後の事は私がやろう。お前達は謹慎処分として待機しておけ……最終フェーズと共に謹慎を解除する』
その言葉を最後に連絡を切り、椅子に深く座る。その視線は空を見つめるも遠い所を見るような目だった。
『ここに来るとは思わなかったが、計画に変更はない』
その言葉と同時に椅子から立ち上がり、外の景色を見つめる。
島全体を見渡せる景色にその人物は薄ら笑いを浮かべた。
『……フフ……もうすぐだ……もうすぐこの世界を……変えるのだ』
その言葉は誰の耳にも届かず、重い空気に消えていった。